

オバマ外交の9ヶ月 ——歴史的視点から

西 崎 文 子

はじめに——国際協調主義への回帰？

日本では、民主党鳩山政権にとっての外交デビューの週として注目された2009年9月20日からの一週間は、バラク・オバマ大統領にとっての国連デビューの週でもあった。はじめて臨んだ国連総会では40分にわたって、アメリカが国際協調を目指してイニシアティブをとる決意を示して、核不拡散と軍縮、平和と安全保障の追求、地球環境問題、グローバルな経済問題の四つの重要課題にどのように対応していくべきかを、時に踏み込みながら語った。続く安保理サミットでは、「核のない世界」に向けて、包括的核実験停止条約や核不拡散条約の強化を訴える決議案の採択を主導し、G20の会議では、経済・金融問題への国際的対応に関する討議で中心的な役割を果たした。

オバマ大統領のこの一週間のスケジュールをみただけでも、先のジョージ・W・ブッシュ政権との違いは明らかである。ブッシュ大統領は、国連や国際協調の理念に敵対的で、上院の承認を得ることもできないような人物であるジョン・ボルトン氏を国連大使に任命し、またイラク戦争開始前には、国連総会の場で、「今こそ国連が現状に対応できる機関であるのか、それともの外れな組織であることを示すのか、それを明らかにするときがきた」、と挑戦状を突きつけた。ブッシュ大統領が単独主義の極端な例であったとすれば、オバマ大統領は、最近の大統領の中でも際立った国際協調派であると言えるであろう。このようなオバマの姿勢は、相乗効果を生み出しており、中国やロシア、フランス、そして、日本までもが、国際協調のアジェンダの主導権を競っている感すら否めない。

1. オバマ外交の9ヶ月

オバマ政権誕生後の9ヶ月は、外交に関するオバマ色が強くみられた期間でもあった。国連演説で自ら力説したように、大統領は、医療保険制度などの国内問題が山積する中にありながらも、精力的に外交日程をこなしてきた。就任直後に、グアンタナモの捕虜収容所の閉鎖を決めて新しい方向性を明示した後——もっとも予定どおりの実施には至っていないが——、4月にはプラハで「核兵器のない世界」へのヴィジョンを掲げ、6月には、カイロ大学で、中東和平やイスラム世界との対話を謳う演説を行った。また、グリーン・ニューディールを掲げて環境問題に積極的に取り組む姿勢も示している。これは、当初、地球温暖化の事実すら認めようとしなかったブッシュ政権の姿勢を180度回転させるものであった。

これらの演説の間を縫って行われた二国間、多国間の外交でも、それなりの具体的進展はあらわれている。なかでも重要なのが、ロシアとの関係改善である。東欧へのミサイル防衛システム導入という、米ロ間の対立の原因となっていた計画を凍結したことがはずみとなって、メドベージェフ大統領との間で開始されていた核軍縮交渉は障害をかかえなが

らも前進しつつある。その影響もあり、足並みの乱れがちであった対イラン政策についても、ロシアとアメリカとが密接に連携をとっていくことが確認された。この変化が東欧諸国との関係にどのような影響を与えるかは不明である。しかし、NATO諸国との関係改善も進んでおり、オバマ大統領の「対話外交」を推進する環境は、少なくともG8などの主要国との間では順調に整いつつあると言えるであろう。

その他にも、進展はあまり見られないものの、ジョン・ミッチェル特使を通じた中東和平交渉開始の模索、イランとの対話、北朝鮮との対話など、対話路線を基調にしていこうというオバマ外交の方向性は、政権発足後の9ヶ月間に内外に示されたと言ってよい。

2. オバマ外交の特質

オバマと世界

オバマ外交が、これまでのアメリカ外交とは性格を異にする印象を与えるのはどうしてなのか。なぜ、オバマ大統領に対する支持が世界各地で高いのか——もちろんブッシュ大統領の後だという大きな利点があることは確かだが、それは別としても、オバマ大統領と世界との関係を良好にしているいくつかのポジティブな点が挙げられるであろう。

第一は、オバマ大統領が、世界各地の歴史や文化、知性に対する感性を持ち、それを表現する力を備えていることである。コーランからの引用を散りばめたカイロでの演説がその最たるものであるが、プラハでも、トルコでも、オバマが訪問先で示すその地の文化や歴史に対する関心は、「傍若無人なアメリカ人」といったイメージとは対照的で、人々の心をやわらげる効果を持っている。訪問先の選択を見ても、奴隷貿易の拠点であるガーナのケープコーストを子どもと一緒に訪ねたり、メルケル首相とブーヘンヴァルトを訪問したりするなど、シンボリックな意味をもつ行動によって大統領個人の感性を示したことは、強い印象を残したと言えるであろう。

第二は、演説や発言を通じて示される論理の力と歴史的感覚である。これは、2008年の大統領選挙後に行われた「勝利演説」や、プラハでの「核のない世界」演説によく示されていた。「勝利演説」で、オバマが20世紀の歩みを106歳のアメリカ人黒人女性の人生と重ね合わせながら語り、われわれは多くを達成してきたけれども、やるべきことも沢山残っていると語りかけたのは記憶に新しいところである。また、プラハの演説では、核軍拡競争が冷戦の産物であることを再確認し、核拡散も、いわばその「副産物」であることを示唆した。そのうえで、核保有国は軍縮をし、非保有国は核兵器を開発せず、すべての国は核の平和利用を認められる、という単純明快なヴィジョンを示したのである。現状への批判を未来への行動へとつなげていく思考は、オバマの最も得意とするものであろう。

第三は、イデオロギー性がこれまでの大統領と比較して弱いこと、あるいは、アメリカ外交につきものの独善性があまり見られないということがあげられる。確かに、オバマもアメリカの利益や安全を守るのが自分の任務であり、アメリカの安全のための「抑止力」を維持することを明言する。ただ、その際にも、アメリカを「自由」や「正義」の代名詞として捉えたり、アメリカの「敵」を「アメリカをねたむ変質者」だといった決めつけ方をしたりはしていない。むしろ、「自由」や「正義」を歴史の中に位置づけ、将来の目標に結びつけて説明されることが多い。そのために、オバマの描く世界からは、アメリカ中心主義の匂いがあまり感じられず、それがアメリカ内外での受け入れを容易にしているのである。

オバマ外交評価の難しさ

それでもなお、就任後9ヶ月の時点で、オバマ外交が成功にむけて進みつつあると評価するのは難しい。その最大の理由は、オバマ政権が直面している問題の厄介さと多さにあるのは間違いない。イランと北朝鮮の核問題、進展の見えない中東和平問題などはもちろんだが、やはり最大の懸念材料は、アフガニスタンとパキスタンの情勢である。オバマ政権下で増派が決定されてからもさらに悪化する治安情勢や、増加傾向を見せるアメリカ人兵士の死者数もさることながら、アフガニスタンでの民間人死者の増加や大統領選挙をめぐる不正疑惑、カルザイ政権の腐敗と人々の離反は、アフガニスタンを主戦場であると宣言したオバマの立場を著しく弱めている。駐留米軍のマクリスタル司令官からは、追加の増派をしない限り、戦争は敗北に終わるという強い増派要請が出ているが、アメリカ世論がこれ以上の関与に懐疑的であることも事実である。増派するにせよしないにせよ、オバマ政権の軍事戦略が、魔法のような効果をもたらすとは考えにくい。

さらなる増派がヴェトナムの悪夢をよみがえらせ、リベラル派の支持を失う危険性を高める一方で、アフガニスタンを放棄するようなことになれば、保守派からの総攻撃で国内での立場をさらに弱めてしまう。そして、その後のパキスタンやアフガニスタンがどうなるかを想像してみると、オバマ政権が直面しているのは、すべての側が敗北に終わるような状況にすら思えてくる。そう考えると、アメリカは国際協調の場に戻ってきたというオバマの国連でのメッセージの裏には、アメリカには助けが必要だというメッセージも透けて見えるのではなかろうか。この点に関連して言えば、このような混乱を招いた大きな責任がアメリカにあることを明言しないままに、アメリカ単独では問題を解決できないと強調するオバマの演説には、率直さに欠け、粉飾された響きがあると違和感を持ったものも少なくはないであろう。いずれにせよ、世界をよりよい方向に主導する意欲を見せながらも、前政権から引き継がれたさまざまな問題への対応に振り回されているのがオバマ政権の現状であるのは否めない。

政治とレトリックの問題

しかし、これはオバマ外交の評価を難しくしている理由の一つにすぎない。実は、オバマ外交の評価を困難にしているもう一つの理由は、いわゆる「理念と現実」、「レトリックと具体的な政策」という外交にまつわる古典的な問題にあるのではないだろうか。

オバマ大統領は、その雄弁さを武器に、選挙に勝利し、アメリカ内外で聴衆を魅了してきた。先の国連演説でも、立ち見が出たぐらいの人気を見せた。しかし、皮肉なことに、その演説が人々を魅了すればするほど、オバマ大統領が、本当に言葉どおりの外交を進めるかどうかに対しての判断が分かれてしまうのである。たとえば、オバマ外交の理念を歓迎する人々は、ふと冷静にかえり、このようなヴィジョンが本当に実現可能なのかという疑念を持つかもしれない。また、オバマ大統領が本気で自分の言葉を信じているのか、融和的なヴィジョンの裏にはアメリカの国益をにらんだ計算高い目的が隠されているのではないかと勘ぐる人もいるかもしれない。あるいは、ディック・チェイニー前副大統領にみられるように、このようなヴィジョンそのものがナイーブで、アメリカや同盟国の国益に反する危険なものだと考えるかもしれないであろう。このようにオバマが雄弁であればあるほど、さまざまな憶測を呼び、言葉が現実になるまで、信頼性 (credibility) が得られ

ないといった状況が生まれてしまう。9月に行われた一連のオバマ演説についても、アメリカの国際協調路線は明確になったが、中身には乏しかったといった批判がマスコミなどで流れるのはその典型だと言える。雄弁であることは、選挙戦では有利であるが、いざ政権をとってみると、両刃の剣となる可能性を秘めているのだ。

長期的視野の必要な問題群

関連して、もう一つの問題は、オバマ大統領の掲げる外交課題の多くが、達成に時間がかかるものであり、短期的な成果を生み出すのが困難だということである。核兵器の廃絶、地球環境の保全、イスラム世界との対話の促進などの一般的な目標は、大統領自身が認めるように、一世代、ましてや一大統領の任期中に達成しうるものではない。さらに問題なのは、より個別的な問題、たとえばアフガニスタンとパキスタン、イラク、中東和平、イランや北朝鮮など、人々の関心が高い問題も、やはり長期的な取り組みがあってはじめて成果につながるものなのだ。しかも、オバマ大統領は、対話や協調、信頼醸成や忍耐といった外交手段にこだわっている。このような手段は、確かに長期的な目標達成には最も適した手段だと考えられるが、短期的な成果には直結しにくい。となると、短期的な成果を求める移ろいやすい世論に棹指しながら、あくまでも長期的なヴィジョンを見据えつつ、持続的に忍耐強く外交を続けていくことができるのか、軍事力などの直接的力の行使の誘惑に抵抗し続けることができるのか、といった問題が、オバマ政権の課題となってくる。

これは、ある面では、オバマ政権に特有の問題であろう。彼の掲げる国際協調路線や外交目標、前政権から引き継いだ負の遺産、そして、国内の党派対立といったさまざまな要素の組み合わせは、これまでの政権には見られなかったユニークなものであることは間違いない。しかし、別の面では、アメリカ外交史の中には、オバマ外交の行方を考察するためのヒントを与えてくれる人物がいないわけではない。そこで、ここではやや恣意的に、ウッドロー・ウィルソンとリチャード・ニクソンといういわば対照的な二人の大統領の「亡霊」をよみがえらせたい。二人とも、オバマ政権の中でほとんど取りざたされないが、アメリカ外交を考えるうえではそれぞれ特徴的な人物だからである。

3. 二人の亡霊——ウィルソンとニクソン

繰り返しになるが、ウィルソンとニクソンとは、オバマ外交の中で触れられることの少ない大統領である。リンカーン、フランクリン・ローズヴェルト、ケネディ、レーガンなど、歴史を好むオバマ大統領には尊敬する大統領が幾人かいるが、この二人はそのリストに入っていない。その理由は、ニクソンについては今さら説明するまでもないであろう。ニクソンは、うそつきで、汚い言葉を話し、自らに責任の及ぶ恐れのある犯罪をもみ消すためには大統領権力を濫用し、最後には誰からも守ってもらえずに辞職に追い込まれた。歴代の大統領の評価を歴史家に問うアンケートでは、ワースト5に入る人物であり、オバマが触れる必要を感じないのは当然であろう。

しかし、ウィルソンがなぜ敬遠されるのか、これに対する明確な答は見つからない。ウィルソンは国際連盟の立役者であり、自由や民主主義をアメリカの外交理念として掲げ、華々しく国際政治の舞台に登場した人物であった。歴代大統領の評価でも、4～8番目ぐ

らいには入っている。ただ、民主主義や自由といった理念を掲げたウィルソン外交が、ブッシュ外交をささえた「ネオコン」のレトリックを彷彿とさせ、ブッシュ政権時代の軍事力による介入主義を思い出させるために、オバマはウィルソンの名を口にしないのかもしれない。また、「私はナイーブではない」とことあるごとに表明し、現実主義者としての自分を強調するオバマ大統領としては、理想主義的であると同時に独善的だったとも評されるウィルソンとは距離をおきたいと考えている可能性も否めない。

ウィルソン——理念重視型的外交

しかし、この二人の外交の特徴を検討することによって、オバマ外交の特質と可能性とを見るための貴重な視座が与られるのも事実である。それは、理念重視型的外交と、成果重視型的外交の強みと弱みを、この二人の政策が非常に鋭角的に示しているからである。

ウィルソン大統領については、今さら説明の必要はないであろう。彼は1913年から1920年までの2期を大統領としてつとめ、在任中には、第一次世界大戦とパリ講和会議だけでなく、ロシア革命や、革命後の中国やメキシコとの関係など、20世紀を形作るような大事件への対応を迫られた。先ほど触れたように、国際連盟の創設に指導力を発揮したほか、第一次世界大戦を「世界を民主主義にとって安全なところにする」ための戦争、あるいは、「戦争を終わらせるための戦争」と位置づけたことでも記憶されている。

つまり、ウィルソン外交は、良い意味でも悪い意味でも、アメリカの理想主義的外交の代名詞として使われることが多いのだが、彼が試みた理想主義的な外交は、実際には失敗に次ぎ失敗を繰り返した。たとえば、1913年から17年にかけては、革命後混乱が続くメキシコに対し、対立する勢力の間の調停を申し出ながら内政に深く干渉し、道義にもとるとみなした政権を打倒するために軍事行動を起こした。さらには、アメリカの支持を失ったことに憤る革命派の一人、パンチョ・ビジャが、国境をこえてニューメキシコの町を襲撃すると、彼を「捕捉」するための兵を送り込み、メキシコ軍との衝突を引き起こすことになる。このような行動によって、ウィルソンは、メキシコの反米感情を一挙に強めてしまったのである。また、ウィルソン大統領は、ニカラグア、ドミニカ共和国、ハイチなど、政情の不安定な国に対し、歴代の政権の中でも最も頻繁に海兵隊を送り込みながら、秩序の回復や治安の改善を実現するのに失敗した。

これは、ある意味で理念先行型的外交の典型的な失敗例であった。ウィルソンは、就任直後からラテン・アメリカと新しい関係を築くことを宣言し、アメリカは「平等と尊敬」の原則に立って、彼らの利益を理解し、彼らの友人となると明言した。そして、南北アメリカを貫くものは、憲法に保障された自由や人権であり、物質的利益よりも、共通の精神、共通の価値こそが重要なのだと語っていた。このように相互の自由や自己統治の(self-government)の擁護を謳うウィルソンが、なぜ、ここまでの軍事干渉をおこない、しかも失敗したのであろうか。

それは、一つには、ウィルソンが野心的な目標を掲げながら、その実現について楽観的にすぎたことにある。ウィルソンは、単なる治安の回復や秩序の安定だけでなく、立憲的な手続きを踏んだ政府の選出や、民主主義制度の確立をラテン・アメリカの国々に求めた。このようにハードルを高くした結果、アメリカの介入は理念的であると同時に際限のないものになってしまったのである。

言い換えるならば、ウィルソンのいう「自己統治」がハイチやドミニカ共和国などで実現するためには、秩序や治安の回復が実現し、責任力のある政府が樹立され、経済的安定が見られるなど、時間のかかるプロセスが必要であった。それは、一筋縄でいくものではなく、途中で揺れ戻しや、多大な犠牲を我慢しなければならないものである。しかし、秩序の崩壊が経済や安全保障にもたらす影響を恐れるアメリカは、自立的な政府の樹立や、経済的安定を実現するまでの我慢に耐えられず、結局は、軍事力による強制的な秩序回復などの行動に踏み切ることが多かった。その結果、民主主義のための介入が、アメリカの利害を守るための介入と区別できないものになってしまう。さらに、介入政策は、アメリカに対する反感を生み、現地の社会の分裂を招き、さらなる秩序の崩壊が起こる——このような悪循環が繰り返されることになったのである。

もう一つは、ウィルソンの独善性にあった。彼は、「自己統治」の原則を掲げながら、自分こそが、誰が民主主義的で正統な指導者であるかを最も良く知っているという確信を持っていた。一方で、現地の住民の自治や自主性を尊重すると宣言しながら、他方で、アメリカは「利他的」であるからその地域の利害を代弁できると考えて行動するという彼の外交のあり方が、当該地域からの強い怒りを招くことは必至であった。

ただ、同時に重要なのは、ウィルソンがこのような失敗を繰り返しながら、決してシニカルにならなかったことである。ウィルソンは、ラテン・アメリカ諸国に「よい指導者を選ぶよう教える」という自分の行動が、ともすれば軍事介入につながったり、ラテン・アメリカ諸国の反発にあたりすることに気づいていた。メキシコ情勢を「変わりやすい水銀のようだ」と嘆き、メキシコの経験から、革命後のロシアに対して出兵をためらったことも知られている。しかし、それでもなお、彼は、国際関係の基本は、自己統治能力をもった国民同士が平等な友人関係を築くことにあるという信念を捨てようとはしなかった。公開外交や公海の自由、軍縮、主権国家の平等、国際組織の樹立など、有名な14か条の原則に掲げられた概念の多くは曖昧であり、かつ時代的な限界を持ったものであったことは否定できない。しかし、ウィルソンの掲げた原則は、彼の愚直さゆえに、その限界や矛盾を露呈しながらも、20世紀を生き延びることになったと言える。

ニクソンとキッシンジャー——成果重視型的外交

ウィルソンが、自分の外交理念が思ったような成果を挙げないことに苦悩したとすれば、理念を脇に置き、徹底的に成果重視の外交をおこなったのが、1969年から1974年まで大統領職にあったニクソンと、大統領補佐官あるいは国務長官として彼に仕えたヘンリー・キッシンジャーの二人であった。このうち、キッシンジャーは、今日でも核廃絶を訴える賢人グループの一員などとして、しばしば注目を浴びている。ただし、ここで取り上げたいのは、ニクソン政権時代の外交についてである。

前述のように、最近のアメリカのメディア等では、ニクソン政権に対する言及はあまり見られない。これはよく考えてみると、奇妙なことである。というのも、前の政権から状況の厳しい戦争を引き継いだという点では、ニクソンとオバマとは、大いに共通点があるからだ。アフガニスタンとオバマのヴェトナムと言う人はいても、ニクソンとオバマとを比較する人が少ないのは、この二人があまりにも違いすぎだからかもしれない。しかし、それを言うならば、ヴェトナムとアフガニスタンを同等視することのほうが無理がある。

なぜなら、ヴェトナムではアメリカに抵抗する主体（北ヴェトナムや南ヴェトナム解放民族戦線）や、目的（反植民地主義と独立）が明確であったのに対し、アフガニスタンの現在の状況はそれとは異なるからだ。ヴェトナムでは、米軍の撤退によって国民国家形成への道が開けたが、アフガニスタンではそう簡単にはいかないことは明らかである。このように考えると、「現地」の状況を把握することなく、「オバマのヴェトナム」などと表現するところにアメリカ中心的な世界観がにじみ出ているのではないかという気もしてくる。

それはともかく、ウィルソンとは対照的に、ニクソンとキッシンジャーは、外交における理念を軽視し、これを信用しなかった指導者であった。それを典型的かつ逆説的に示すのは、1969年1月20日に行われたニクソンの第一回就任演説である。全体の4分の1の分量を外交に割り、対決から対話の時代に入ったことを謳いあげ、平和の言葉を連発するこの就任演説には、ヴェトナムの語は一つも出てこなかった。1969年の状況を何も知らずにこれだけを読んだり聞いたりするならば、アメリカがヴェトナム戦争の泥沼に入っており、国内では反戦運動が渦巻いていたことなど想像もできないかもしれない。

そのように現実から遊離したレトリックを用いて平然としていたニクソンとキッシンジャーは、また稀代の策謀家でもあった。中国との国交回復を実現するために、ルーマニアやパキスタン政府を利用し、秘密外交で国民の目をあざむき、国務省を蚊帳の外に置いたことは有名である。あるいは、あえて正気を失ったふりをして相手に不安を与え、思ったような結果を引き出すといった政策（いわゆるmadman theory）をとることも厭わなかった。このような二人にとっては、理念と現実の乖離などといった問題は、およそ関係のないものだったのである。

ただ、このような外交手段を用いて、ニクソンとキッシンジャーがさまざまな成果を生み出したこともまた事実として認めるべきであろう。ニクソン政権期にアメリカは対中接近を果たして「上海コミュニケ」を発表し、ソ連との間でデタントを進めた。デタントに対しては、後に保守派から「非道徳的」な政策だとして批判を浴びることになるが、それでも、ニクソンとキッシンジャーの思い描いていたとおりの成果が導かれたことは確かである。また、ヴェトナムからの撤退——およそ名誉ある撤退ではなかったが——も実現した。そして、何よりも、ニクソンは1972年の選挙で再選され、もう少しで建国200周年を祝う大統領となるはずだったのである。

それまでの政権下では考えられなかったような「外交革命」を成功させたのがニクソンとキッシンジャーだったわけだが、では、この成果をもって、彼らの外交を評価できるかどうかと考えると、やはり大きな疑問を呈さざるを得ないであろう。第一の問題は、成果をあげるためにとったニクソン政権の政策があまりにも無節操で大きな犠牲を伴うものだったことである。ヴェトナム戦争を終結させる過程で、ニクソン政権が二度にわたる激しい爆撃（うち一つはいわゆるクリスマス爆撃）を行ったことはよく知られている。また、戦線を秘密裡にカンボジアに拡大し、その後のカンボジアにおける悲劇を準備したのも彼らだった。それも、アメリカの撤退を「名誉ある」ものにするという、それだけのためである。成果のためには、国際法や道義を無視してもかまわない、大統領なのだから責任は問われるはずもない。ニクソンは明らかにそう考えていた。しかし、どれほど成果がほしいといっても、国家の行動の「正当性」は問われないわけにはいかないであろう。

言い方を変えるならば、ここに見られるのは、ニクソンやキッシンジャーの「没価値」

性とも言えるものである。ここで没価値性というのは、ウェーバーの言う「中立性」ではなく、むしろ「価値」を排斥し、シニカルに自己目的を追求するやり方とでも言うべきものであろうか。だからこそ、ニクソンはヴェトナム戦争を終わらせながら、戦争の本質的な意味を問わず、中ソと接近しながら、冷戦の意味を問うことはしなかった。それは、ウォーターゲート事件で、大統領の行動とはとても思えない隠蔽工作にかかわったことともつながっている。このようなシニカルな外交のあり方は、最終的にはアメリカの威信を傷つけ、アーサー・M・シュレジンジャーの言う「信頼の崩壊」につながるという皮肉な結果となった。

4. オバマ外交の課題と選択

このようにウィルソンとニクソンの外交を比較した上で現在のアメリカを見ると、いくつか注意すべき点が浮かび上がってくる。一つは、成果ばかりを求めるマスコミの言説に惑わされてはいけないということである。オバマも、ニクソン張りの行動をとって、世間を驚かせ、成果を挙げることは可能かもしれない。もしかすると、2010年の中間選挙で民主党を勝利させるためには、それが期待されている面もあるかもしれない。しかし、長期的には、そういった行動によって失われるもののほうが大きい可能性も高い。もう一つは、理念重視型の外交のはらむ危険性に、常に注意を向けるべきことである。ウィルソンが、民主主義や自決権などの理念を国際政治の舞台に登場させた功績を否定することはできないが、その理念ゆえに、そして、アメリカが答を知っているという過信ゆえに、軍事力による過剰介入が導かれたことは強調してもしすぎることはない。オバマがニクソンと類似の行動をとることはなさそうだが、彼がウィルソンの過ちを繰り返す可能性は皆無ではない。オバマ大統領が、世界各地の声に耳を傾けていくかどうか、アメリカの指導力にこだわり続けて独善性の罠に陥らないかどうか、注意深く見ていく必要がある。

すでに指摘したように、オバマの掲げるヴィジョンには、アメリカ内外から大きな期待が寄せられてきた反面、それが実現可能かどうかをめぐる疑問もつきまとってきた。オバマの現実主義的な感覚に対する評価も高いが、それでもなお、彼の政権が、「所与」、つまり歴史に根ざす国家間・民族間の対立や、アメリカ国内の政治的圧力などの拘束の中で、どれほどの結果を出しうるかは支持者の間からも不安の声があがっていた。では、結局は大して変化は見られないだろう、ブッシュ政権のようなアグレッシブな介入主義は鳴りを潜めても、アメリカ外交の本質は変わりようがないとあきらめたほうがよいのか、と問われるならば、やはりそれは余りにも惜しいと答えるべきであろう。

オバマ大統領によって息を吹き込まれた「核のない世界」や「対話による外交」といった理念を現実に近いにつけるために不可欠なのは、アメリカのリーダーシップよりもむしろ、そのような理念を掲げて地道に努力を続けてきた人々、たとえばヒロシマやナガサキの被爆者や、紛争地域で医療活動に取り組んできた人々などにもう一度目を向けることである。言い換えるならば、オバマ政権が誕生した今、われわれが期待するのは、アメリカが国際協調主義に戻り、もう一度世界をリードするというのではない。むしろ、アメリカを国際協調主義の一員（パートナー）として迎え入れ、もう一度、未来にむけての構想を組みなおすことなのではなかろうか。

※本稿は、2009年10月3日のシンポジウムでの報告原稿である。その後、アフガニスタン戦争への更なる増派の決定、オバマ大統領のノーベル平和賞受賞など、外交に関する新たな進展もあったが、それらについては、ここでは触れていない。

(参考文献)

- アメリカ学会編『原典アメリカ史』第7巻（岩波書店、1982年）。
- Ambrosius, Lloyd. *Wilsonianism: Woodrow Wilson and His Legacy in American Foreign Relations*, New York: Palgrave Macmillan, 2002.
- Dallek, Robert. *Nixon and Kissinger: Partners in Power*, New York: Harper, 2007.
- Gardner, Lloyd. *Safe for Democracy: The Anglo-American Response to Revolution, 1913-1923*, New York: Oxford University Press, 1984.
- Issacson, Walter. *Kissinger: A Biography*, New York: Simon and Schuster, 1992.
- Manela, Erez. *The Wilsonian Moment: Self-Determination and the International Origins of Anticolonial Nationalism*, Oxford: Oxford University Press, 2007.
- Ninkovich, Frank. *The Wilsonian Century: U.S. Foreign Policy since 1900*, Chicago: University of Chicago Press, 1999.
- Schulzinger, Robert D. *Henry Kissinger: Doctor of Diplomacy*, New York: Columbia University Press, 1989.
- Small, Melvin. *The Presidency of Richard Nixon*, Lawrence: University Press of Kansas, 1999.
- Steigerwald, David. *Wilsonian Idealism in America*, Ithaca, N.Y.: Cornell University Press, 1994.
- Suri, Jeremi. *Henry Kissinger and the American Century*, Cambridge, Mass: Harvard University Press, 2007.
- オバマの演説は、<http://www.whitehouse.gov/> で読むことができる。